

## 10. 假製東亞輿地圖の作製過程とその「修正再版」図

小林茂（大阪大学名誉教授）

1894年に刊行された「假製東亞輿地圖」（全10図幅）は、日清・日露戦争期の代表的な小縮尺図（100万分の1）としてよく知られている。日本の長崎から朝鮮半島、遼東半島を含む旧満州南部、北京周辺、さらに山東半島と、日清・日露戦争の戦場域さらには戦場になることが予定されていた地域をカバーするだけでなく（図1）、軍用に作製されたとはいえ、後述するように、一般図として公開され、国内だけでなく国外でも参照されることになった。

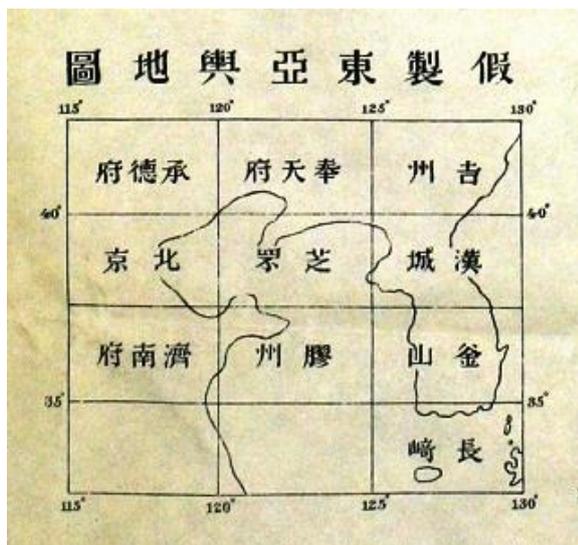


図1：「假製東亞輿地圖」の一覧図（アメリカ議会図書館蔵「清國二十万分一圖一覧表」1894年9月掲載）

筆者らは「假製東亞輿地圖」の作製には、それに先行した「清國二十万分一圖」ならびに「朝鮮二十万一圖」の準備過程で得られた地理情報が活用されたと考えてきた（小林編 2017: 104-105, 156-158）。この見方は大筋では問題ないが、ただしこの二つの図群だけで「假製東亞輿地圖」の記載をカバーするのはとても無理である。そのもとになった1880年代の陸軍将校の偵察旅行は、朝

鮮半島や中国大陸のおもな都市とそれらを結ぶ主要交通路に沿った軍事情報を調査するもので、これでカバーできない広大な部分は他の地理情報によって補うことが不可欠である。これにくわえて、「假製東亞輿地圖」の作製時期は国際100万分の1図の準備が提唱された時期に重なり、それがどのように影響したかという点も考慮する必要がある。これらの点で、筆者は「假製東亞輿地圖」作製過程を多角的に検討する必要性を感じてきた。

他方、後述するような事情で、以上のような留意点について全面的に検討することはなお容易ではない。ただし本稿ではこれまでわかってきたことを示しつつ、「假製東亞輿地圖」が作製にされた時点で、「清國二十万分一圖」や「朝鮮二十万一圖」以外に日本軍がどのような地図情報をもっていたのか、さらにはどのような経過で、この図群が作製されるに至ったか、大筋を把握することをめざすことにしたい。

ところで、「假製東亞輿地圖」の作製については、つぎのような『陸地測量部沿革誌』の明治28（1895）年の記述が引用されている（長岡1992）。

・・・輯製二十万分一圖ハ圖幅廣大ニシテ軍事上大體ノ調査ニ就テハ一覽ニ便ナラス又在來内務省製造ノ分ハ稍舊製ニ屬シ地名等モ變更シテ其ノ用ヲ充タスニ足ラス此ノ際特ニ軍事上大體ノ調査及特ニ鐵道、道路、電信、郵便線竝ニ地名一覽等ノ爲新ニ日本全圖ヲ編纂スルノ議アリ然ルニ當部ハ萬國地學協會ノ決議ニ係ル百万分一世界全圖ヲ各國協同シテ製出セントスル同會主催瑞西政府ノ照會ニ對シ同事業ニ参加スルノ必要ヲ認め製圖科ヲシテ百万分一亞細亞東部輿地圖ヲ立案セシメタリ時會々日清ノ國破レ枢要

地區ノ東亞輿地圖ヲ急増スヘキノ命アリシヲ以テ上記圖案ニ據リ諸種ノ資料ヲ輯集シテ急遽製圖ニ從事シ之ヲ假製東亞輿地圖ト名ケ之ニ應シタリ然ルニ此ノ種ノ地圖ハ作戰上裨益スルトコロ多大ナルモノアリシヲ以テ茲ニ百万分一東亞輿地圖製作ノ機熟シ更ニ既定圖案ニ若干ノ修正ヲ加ヘ以テ隣邦ト共通ノ圖式ニ一致セシメ順次之ヲ製出スルコトナレリ（陸地測量部1921: 127-128）

ここではまず国内用の「輯製二十万分一圖」の図幅のサイズが大きくて使いにくく、しかも地名の変更が反映されておらず、新規の日本全図が必要になっているという議論を紹介するが、同時に国際的に提案されている100万分の1図の作製にあわせて、東アジアの100万分の1図の整備開始の概要を示しつつ、日清戦争の開始という軍事的な状況の変化にも言及して「假製東亞輿地圖」が作製された背景に触れ、さらにそれを改善し、広域をカバーする「東亞輿地圖」の作製開始に言及する。ただし、これらを陸地測量部の業務と考えると、明らかに事実経過と整合しない点が認められる。

まず現在「假製東亞輿地圖」として広く知られている図には明治27（1894）年11月13日の印刷発行と記されている。しかもこの日付は同図群が民間での利用にむけて公開される日として設定されたこと（アジア歴史資料センター資料：C07082036700）を考慮すると、「假製東亞輿地圖」は、上記の日付をかなりさかのぼる時期にすでに印刷されていたことが明らかである。したがってその準備はさらにさかのぼる時期に開始されたとみるべきであろう。

また『陸地測量部沿革誌』が社会での参照に向けて刊行された点を考慮すると、上記の記事がその1895（明治28）年の事績に紛れて記された背景には、「假製東亞輿地圖」作成に向けた作業が秘密裏に早期から開始されたこともうかがえる。以下ではこれらの点に留意しつつ、「假製東亞輿地圖」の作製ならびにそれにつづく「脩正再版」図

の刊行について検討を進めたい。

## 1. 「萬國地學會議」での100万分の1図の刊行に関する決議と「假製東亞輿地圖」の作製

「假製東亞輿地圖」の作製には、「萬國地學協會」を主催していたスイス（瑞西）政府からの照会が関連していたことが上の引用からわかる。よく紹介されるように、ドイツの地理学者、アルブレヒト・ペンク（Albrecht Penck 1858-1945）は、スイスのベルンで1891年に開かれた第3回国際地理学会議で、一定の図式でかなりの大縮尺の地図を国際的に作製することを提唱し、多くの国の地理学者の賛同を得て、100万分の1の縮尺を適当としてその実施が検討されることになった（金澤1959; 小笠原1962）。これについてスイスの外務大臣から照会を受けた外務省が内務省に連絡したところ、陸地測量部が主管することになり、検討の結果を陸軍大臣（大山巖）が閣議に報告している（アジア歴史資料センター資料：A15112685200、1893年11月24日）。その姿勢は積極的で、陸地測量部に送られてきた書面の趣旨を取り調べたところ、「其企図大ニ有益ノ挙ト存候就テハ本邦ニ於テモ國要ノ為メ須要ノ地方則チ隣邦若干ノ地區ヲ併セタルモノハ到底調整セサル可ラサルモノニ付右企図賛同相成候テ・・・」と述べつつ、それに関連する費用についても検討していくこととしている。

100万分の1図を国際的に協力して作製しようというこの事業は必ずしも順調には進まなかったが（Pearson and Heffernan 2015）、ともあれ日本は政府の事業として以後これに参加していくことになる。この積極的推進の立場の採用については別に検討を要するが、以上の陸軍大臣の報告を承認する閣議決定（11月29日）によって100万分の1図の作製方針が決定されたとみてよいであろう（アジア歴史資料センター資料：A15112685200）。

他方、「假製東亞輿地圖」が作製される経緯には、

上記の引用に触れていないこともあった。『陸地測量部沿革史（草案）』の第二分冊にはこれに関連した興味ぶかい記載がある。この『陸地測量部沿革史（草案）』の性格や編集過程にはなお不明な点が多いが、『陸地測量部沿革誌』の正編の下書きとして作製されたものと考えられ、謄写版で印刷されたようである。その第一分冊は陸地測量部が設立されるまで、第二分冊はその後から明治39（1906）年までをカバーしている（小林2013: 8-9）。戦後になって作製されたリプリントがときおり古書市場に出ることがあり、筆者はそれを入手した（図2）。

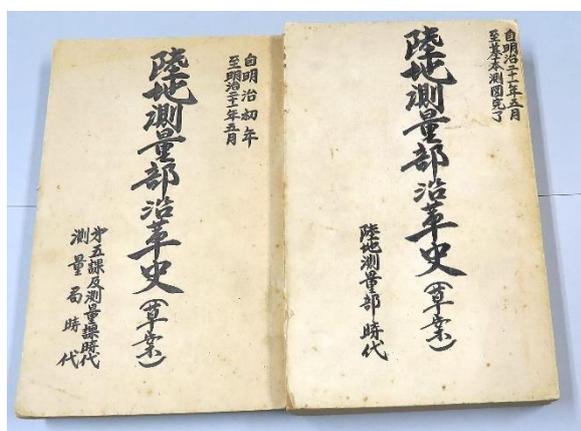


図2：『陸地測量部沿革史（草案）』の表紙

「假製東亞輿地圖」に関連する記載は、やはり明治28（1895）年の事績として照会されており、上記の引用とよく類似するが、はるかに詳しい。

（1895〔明治28〕年）二月十三日寺内参謀本部第一局長事務取扱、土屋全第二局長ハ参謀総長ニ上申シテ曰ク「是迄陸地測量部ニ於テ輯製セラレタル二十万分一日本圖ハ軍事上大体ノ調査ニ就テハ稍緻密ニ失シ且圖幅廣大ニシテ一覽ノ便ヲ缺キ又在来内務省製造ノ分ハ稍旧製ニ属シ地名等モ変更致居不便不尠ニ付此際特ニ軍事上大体ノ調査及特ニ鐵道、道路、電信、郵便線並ニ地名一覽等ノ爲陸地測量部ニ於テ百万分一ノ日本全圖ヲ輯成相成候様致度」之ヨリ先キ萬國地學協會ノ決議ニ係ル百万分一地球全圖ヲ各國協同

シテ製出センコトヲ同會主催瑞西國政府ヨリ我政府ヘ之ヲ照會シ其下問ニ對シ早川製圖科長ハ（明治二十七年二月）百万分一亞細亞東部輿地圖製圖案ナルモノヲ立案シ同時に片山（直英）、山際（七司）、千野（忠秀）ノ各測量手ニ命シ此製圖案ニ據リ圖式、圖例竝一覽表ヲ製作セシメ當部ハ之ヲ添ヘテ同事業ニ参加スルノ必要ヲ覆申セリ時會々日清ノ國交破レ枢要地區ノ東亞輿地圖ヲ急増スヘキノ命アリ當部ハ乃チ上記圖案ニ據リ諸種ノ資料ヲ輯集シテ急遽製圖ニ從事シ之ヲ假製東亞輿地圖ト名ケ其命ニ應シタリ此ノ地圖ハ作戰上裨益スルトコロ多大ナルモノアリシカ更ニ上記二局長ノ上申アリ茲ニ百万分一東亞輿地圖製作ノ機熟シ更ニ既定圖案ニ若干ノ修正ヲ加ヘ以テ隣邦ト共通ノ圖式ニ一致セシメ續々之ヲ製出センコトヲ上申シ尋テ之カ認可ヲ得爾後之ヲ繼續シテ以テ今日ニ及ヘリ（陸地測量部 刊行年不詳：71-72、括弧内は筆者）

まず国内用の20万分の1図に対する不満は、参謀本部の幹部から1895年になってから表明されたもので、「假製東亞輿地圖」がすでに民間用に印刷刊行されていた時点のものであることがわかる。他方、それを1年半ほどもさかのぼる時期に「萬國地學協會」の決議に関連したスイス政府からの照会が陸地測量部に伝えられ、製図科長の早川は1894年2月に、「百万分一亞細亞東部輿地圖製圖案」を提出した。3名の陸地測量手による作業の着手はこれにさかのぼる時期であったと考えてよいであろう。

なおスイス政府から日本政府への照会の日付は1893年7月4日、日本の外務省から内務省にそれが伝えられたのは同9月28日である（アジア歴史資料センター知資料：B07080275700）。陸地測量部の幹部であった早川は、同10月のはじめにはこの照会に接したとみてよい。また以上からすれば、国際100万分の1図作製への積極的な態度につい

ては、この早川製図科長が大きな役割をはたしたと推定される。

早川(早川省義[はやかわあきよし]1852-1903)の履歴をみると、実父は幕臣の高松彦三郎茂省で、ペリー来航後は御台場普請掛、長崎伝習所の仕事にたずさわり、幕府遣欧使節に参加したという。その次男の省義は、1870年に早川家の養子となり、沼津兵学校から陸軍教導団に編入されて、陸軍の工兵将校となった(樋口 2006)。陸軍では地図作製業務に従事し、フランス将校のジュルダンらとともに測量に従事した(細井 2006)。参謀本部の設置(1878年)以後は測量課、さらに測量局に属し、輯製二十万分一圖(国内用)の作成に努力するほか、1887年には外邦図作製を提議し、清國二十万分一圖を作製するに至った。さらに地図の図式の制定や製版法の技術導入にも功績があり、陸地測量部の設立(1888年)以後は製図科長心得となって活躍した。また日清戦争や北清事変に際しての地図の供給についても高く評価されている(アジア歴史資料センター資料: C06083895400)。早川の100万分の1図作製構想が、このような自身の実績をふまえて準備されたと推定できる。

「假製東亞輿地圖」作製が構想されたころの陸地測量部では、日清戦争開戦に向けて「清國二十万分一圖」・「朝鮮二十万分一圖」の完成が急がれており、参謀本部第二局員の伊地知幸介少佐はすでに一部印刷された「朝鮮二十万分一圖」を携帯して、1893年5月から在京城公使館員の渡邊鐵太郎とともに朝鮮北部の咸興道・平安道を視察している(渡辺ほか、2017: 155)。清国と朝鮮の国境地帯は、開戦後の進撃ルートとして重要な地域として考えられており、この偵察が実施されることになったと考えられる。早川は当時これら20万分の1図の最終的な作業を指揮する立場にあり、スイス政府の照会に接し、すでに完成が近づいていた20万分の1図を基礎にした「百万分一亞細亞東部輿地圖製圖案」をこれにあわせて構想するこ

とになったと推定できるわけである。この場合、100万分の1図の作製が、軍事を優先してまず海外から始められることになったのは、注目されてよい。

ところで、軍事用の「假製東亞輿地圖」がいつ頃できあがったかについては、不明な点が多い。その配布についての記録がアジア歴史資料センターの公開している資料にあらわれるのは1894年7月以降であるが(C07082300200)、それを要請しているのは非軍事的な政府機関で、その時点までに日清戦争(1894年7月末に開戦)に従軍する部隊には行き渡っていた可能性が大きい。ともあれこうした要請が戦闘部隊以外のさまざまな機関から寄せられ、上記のような「假製東亞輿地圖」の公開にいたったものとおもわれる。これを提案した参謀本部事務取扱の児玉源太郎少将は、つぎのように述べている。

假製東亞輿地圖則清韓百万分一圖之義ハ今回ノ事件ニ必用ノ為メ編輯致候モノニ付総而秘密ニ取扱当事件ニ関係有ル者ノ外一切使用不為致候得共畢竟其秘密ヲ要スルハ今日有ル已前ノ事ニ而最早格別秘密ニスルノ必要無之ト相考候且当事件一二就而ハ諸官衙其他一般人民中ニ其地圖ヲ熱望致シ候者不尠候間一般出版ノ地圖ノ例ニ據リ出版致シ候而可然意見御座候間何分之御指揮相成度候也(アジア歴史資料センター資料: C06061241900、1894年10月29日)

日清戦争が日本優勢で展開し、さらに100万分の1と小縮尺であったことも考慮したのか、戦場の地図を軍事情報とする普通の見方に対し、公開に踏み切ったわけである。国内における地図に対する強い需要が圧力になっていたこともあきらかである。

以上からすると、清国との戦争に向けて20万分の1図(朝鮮二十万分一圖および清國二十万分一圖)の編集が進んでいる時期に、国際地理学会議での提案に沿って打診を受けた陸地測量部では、

幹部が東アジアの100分の1図の製作を提案し、急速にそれに沿った「假製東亞輿地圖」が軍事を優先して作製されたことになる。またこの図はいったん作製されると各方面から要請が寄せられ、当時最新の地理情報が掲載されていたにもかかわらず、社会の利用に供された。

こうした「假製東亞輿地圖」が海外でどのように受け取られたかについては、検討がおよんでいないが、日露戦争時に東アジアの小縮尺図をレビューした小川（1904）および山崎（1905）ではドイツ製・フランス製の100万分1図（Karte von Ost China、1901～1912刊

[<https://catalogue.nla.gov.au/Record/6259894>] およびLa carte au millionième du Service Géographique de l'Arméeのうち1899年刊の中国関係図

[Anonymous 1900] )には、「假製東亞輿地圖」のような日本製図による部分があると指摘している。また山崎（1905）は西欧諸国作製の中国図は北清事変（義和団事件）以後増加すると述べており、「假製東亞輿地圖」はこれらに先行する図として、一定の役割を果たしたと考えてよい。筆者らは、「假製東亞輿地圖」の刊行がドイツやフランスによる縮尺100万分の1中国図の作製を刺激したと考えている（山近・渡辺・小林 2017）。

## 2. 「假製東亞輿地圖」の諸版

以上のような経過で作製された「假製東亞輿地圖」の編集については、今のところその過程を直接示す資料をほとんど発見していない。ただし、それがどのような条件の下で行われたか推測することが可能であり、以下それについて述べたいが、それにはいる前に「假製東亞輿地圖」の諸版について検討を加えておきたい。

「假製東亞輿地圖」のうち今日よく参照されるのは、上記のような1894（明治27）年11月13日の刊記をもつ、民間の利用に向けられた版であろう（以下「公開版」とする）。ただしすでに述べたように、これが刊行される前に軍内部で使われた

版があるはずであるが、これまでそれに接する機会がなかった。本稿の執筆中に、たまたまアメリカ議会図書館が公開している画像にそれと思われるものを発見したので、まずその概要を紹介したい。この図は”Chōsen oyobi Bokkai Kinbō: kase Tōa yochizu”（朝鮮及渤海近傍：假製東亞輿地圖）というタイトルで、全10枚の図幅が貼り合わされている（LCCN: 2006629017）。その左端には、上から「承德府」・「北京」・「済南」と三つの図幅の刊記がみえるが、「承德府」と「北京」図幅については「明治二十七年製圖同年製版／大日本帝國陸地測量」と印刷されているのが確認できる（末尾の「部」は、他の図が重なってみえない）。ただし「済南」図幅については「明治二十七年製圖同年製版同年脩正再版／大日本帝國陸地測量部」とあって、「脩正再版」版であることがわかる。ところが、大阪大学が所蔵する「脩正再版」版（以下阪大脩正再版）には、別に1894（明治27）年11月13日の刊記があるのに、これにはそれが見られない。これから「脩正再版」版には複数の版があることが想定される。なお以上以外で、刊記が読めるのは、右下に位置する「長崎」図幅で、「・・七年製圖同年製版／大日本帝國陸地測量部」と読めるがやはり公開版のような1894（明治27）年11月13日の刊記はない。

以上「承德府」・「北京」・「長崎」（以下LC版）について、公開版と比較したところ、「北京」図幅については、アメリカ議会図書館のものの方が一部詳しくなっていることがわかった。これからすれば、LC版と公開版は同じというわけではなく、一部に違いがあることが確認できる。他方、公開版と阪大蔵脩正再版については、後述するようにすべての図幅についてちがいがみとめられた。

この点を考慮すると、「假製東亞輿地圖」の各版の間には、違いがある場合が少なくないということになるが、ただし軍用に印刷されたものと公開用に印刷されたものには大きな差がないことも明らかである。今後は機会を待ってアメリカ議

会図書館の図幅の現物を調査して、より本格的な比較を試みたい。

### 3. 「假製東亞輿地圖」の編集

つづいて編集に移りたい。すでに触れたように、「假製東亞輿地圖」の編集には、日清戦争開戦前に陸地測量部で作製中であった「清國二十万分一圖」・「朝鮮二十万分一圖」がその主な素材になった。参謀本部所属の陸軍若手将校による1880年代の偵察旅行では、コンパスと歩測による地理情報が英国海図などで補正された。これらの海図には、近代測量による経緯度が記されており、その示す中国大陸の海岸線は、20万分の1図に取り込まれて、一種の基準線としての役割を果たすことになった。また英国海図の作製がおよんでいない朝鮮半島の海岸部については、日朝修好条規締結以後日本海軍が沿岸測量をくりかえし、1882年には海図21号「朝鮮全岸」を刊行した(小林・岡田・鳴海 2017)。またその後も測量を積み重ね、1888年には海図320号「朝鮮叢島南部」(外邦図デジタルアーカイブ、11156号)を刊行し、上記「朝鮮全岸」で充分でなかった部分をカバーすること

になった。このような沿岸部に対して、内陸部については、陸軍将校の得た情報を記載するのみで、上記のように旅行ルートに沿った点と線の図にならざるをえず、空白が多いものとなった。

このため、「假製東亞輿地圖」作製にあたっては、中国や朝鮮の伝統的地誌や地図に依存せざるを得なかった。現在の段階では、その状況を全面的に示すのは容易ではないので、以下ではまずそうした依存をよく示す例を挙げることにしたい。

ここでまずとりあげたいのは、「假製東亞輿地圖」の「長崎」図幅にみられる朝鮮の濟州島の記載である。濟州島には、1880年代に陸軍将校が訪れておらず、「朝鮮二十万分一圖」の57号「濟州島北部」、58号「濟州島南部」は、英国海図によって描かれたと考えられる。図3のように、同島とその周辺島嶼の海岸線だけと言ってもよいほどの図となっているのは、そのためである。周辺島嶼については漢字の島名(牛島など)が示されることもあるが、小さな島や岩礁は英国海図に書かれた地名のカタカナ表記になっている。濟州島の岬についても、そうした片仮名地名が見られる以外に地名等はほとんど示されない。

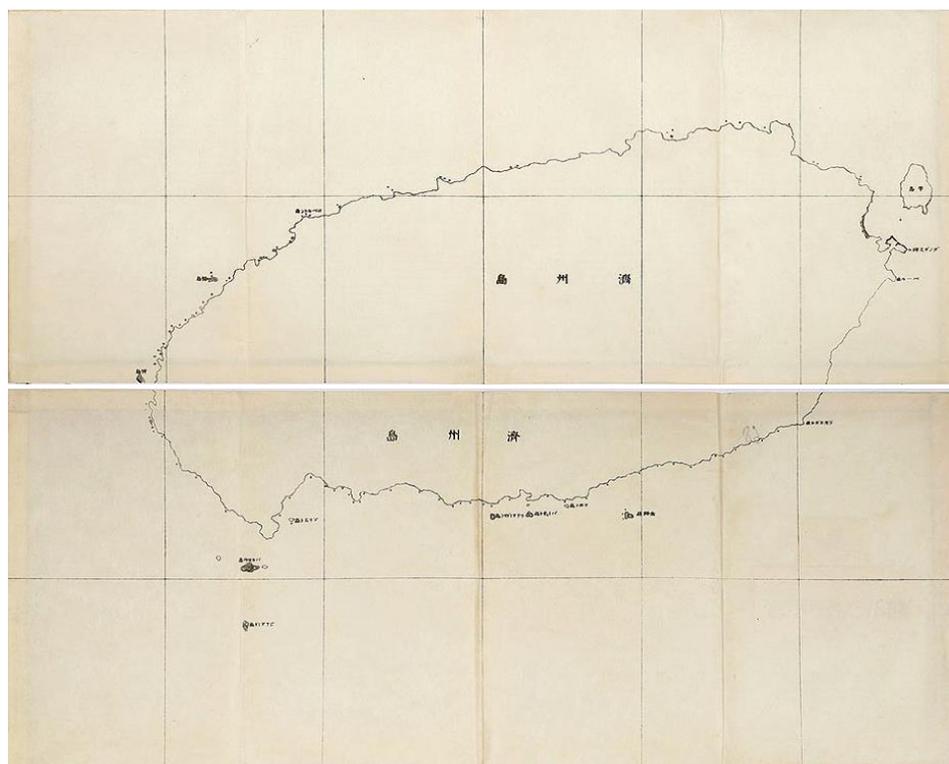


図3: 「朝鮮二十万分一圖」(防衛研究所千代田文庫蔵)に見える濟州島(「濟州島北部」と「濟州島南部」からトリミング) 経線・緯線の幅は10分

なお、濟州島の英国海図については別途調査する必要があるが、図3にみえる地名等はカタカナ表記もものもふくめ1863年刊（ただし1865年11月の修正を含む）の1347号（タイトルはPreliminary Chart of Japan: Nipon, Kiusiu & Sikok and Part of The Korea、アメリカ議会図書館蔵）に一致する。1894年刊のThe China Sea Directory、第3版の記載（Anonymous 1894: 92-95）によれば、濟州島付近（Quelpart & Is.）は1845年のE. Belcherの測量によるとしており、そのご測量があまり進歩しなかった。さらに上記の1888年刊の海図320号「朝鮮叢島南部」にいたっても、「此圖ハ洋紀千八百八十六年一月改正ノ英海軍海圖第百四號ニ原キ我最近ノ測量ヲ添補シタル者ニ係ルノ原圖ハ一千八百四十五年ヨリ八十四年ニ至ル間ノ英国海軍測量ト日本測量ヲ纂輯シタル者ナリ」としているが、濟州島については内陸部の高地や海岸部の岬の名称（ただし多くは片仮名表記）や牛島の灯台（1

箇所）を加筆している程度である。

これに対して「假製東亞輿地圖」の「長崎」図幅にみられる濟州島（上記各版の濟州島の記載に差は認められなかった）は、図4のように様相が大きく変わる。この背景としては、陸軍参謀本部が編集してきた『朝鮮地誌略』（1888年刊）の「全羅道之部」にみられる濟州島に関する記載（陸軍参謀本部編1985: 419-434）も考えられるが、むしろ当時朝鮮国内で作製されていた「大東輿地圖」の「濟州・旌義・大静」図幅（吉田光男監修・金正浩校刊 1994: 第二十二）のような地図の参照が考えられる。またこれに関連して、「長崎」図幅もふくめて「假製東亞輿地圖」朝鮮半島関係の図幅に見られる凡例（「朝鮮國之部」と表記）は、「大東輿地圖」の凡例と対応する点が少なくない点も重要である。とくに中心集落を囲郭のあるもの（有城）とないもの（無城）に2分している点や、烽燧（臺）を示している点は注目される。



図4：假製東亞輿地圖「長崎」図幅（国立国会図書館蔵）にみられる濟州島

表1：「大東輿地圖」と「假製東亞輿地圖」の「長崎」図幅にみられる濟州島の中心集落

大東輿地圖		假製東亞輿地圖「長崎」図幅	
集落の分類	集落名	集落の分類	集落名
邑治（有城）	濟州・大静・旌（生→正）義	州（囲郭あり）	濟（州）
		縣（囲郭あり）	大静・旌義
鎮堡（有城）	禾北・涯月・名月・遮故・摹瑟・海防・西歸・水山・別防・威徳	鎮駅院及著地名	禾北鎮・涯月鎮・名月鎮・遮歸堡・摹瑟慶・海防堡・西歸堡・水山堡・別防鎮・威徳浦

注：「假製東亞輿地圖」（国立国会図書館蔵 [YG837]）および同脩製再版（「明治三十七年製圖同年製版同年脩製再版」と注記、大阪大学蔵）を参照した。



の空白となっている部分の集落や交通路の所在を知ることができるわけである。さらにくわえて、中国側の公的な地名が記されている点も重要である。陸軍将校の手描き図を検討すると、地名の表記を修正している場合がみられる。漢字地名における「官音」と「土音」の違いもあって、彼等が聞き取って記した地名が公式の地名と一致しない場合は多かったと考えられる（小林・渡辺・山近2017: 96-97）。こうした地名の補正にとっても、「十里方眼図」は大きな役割を果たしたと考えられる。

このように見てくると、「假製東亞輿地圖」にみられる都市や交通路のネットワークの枠組みは「清國二十万分一圖」によっているとしても、偵察ルート以外の細部や地名の表記に際し、「十里方眼図」が大きな役割を果たしたと考えられる。これにあわせてさらに考慮すべきは、「奉天省及直隸省中部輯製三十万分一圖」全28枚の刊行であ

る。清國二十万分一圖とは図郭がややちがうが、そのカバーする地域の空白部に集落や交通路を補足するような形で図示している。図5に示した部分についてこの30万分の1図を検討すると（小林・渡辺・山近 2017: 100-101）、すべての地名が図5と一致するわけではないが、その多くが一致することがわかる。

ところでこうした「十里方眼圖」の印刷時期は1894年11月頃以後と推定したが（小林・渡辺・山近 2017: 101-102）、「假製東亞輿地圖」との関係を考えてもう少し早くなる可能性がある。他方「奉天省及直隸省中部輯製三十万分一圖」の製版時期は1905年4月とされており、すでに日清戦争が終わりかけた時期となった。そのためもあってこの図群は日露戦争に際しておもに使用されることとなった。

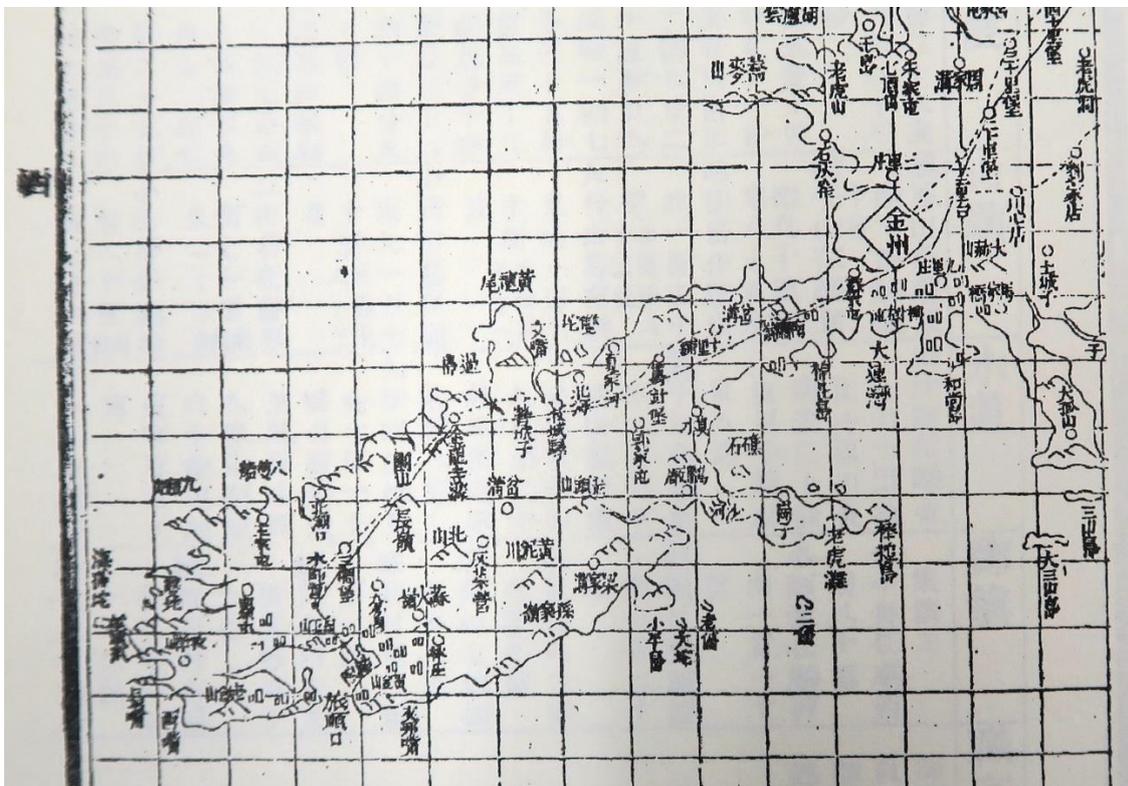


図6：『奉天全省地輿圖說』にみえる「金州廳圖」（古道編委会編2005: 95）

#### 4. 「假製東亞輿地圖」脩製再版の刊行

以上、「假製東亞輿地圖」が1880年代の陸軍将校の収集した資料だけでなく、英国海図をはじめとする水路資料や朝鮮や清国の地理資料の利用によって作製されたことを示した。ただし公開版が1904年11月に刊行されたにもかかわらず、同年中にその脩製再版が行われた背景も考えておかねばならない。

まず「假製東亞輿地圖」が民間を中心急速に販売され品薄になったことが考えられる。新聞などを通じて日清戦争の報道に接するに際し、その展開する場所の確認に必要と考えられた可能性は高い。もちろん当時は民間でもさかんに関係地域の地図が出版されていたが、一枚物の図をはるかに超えるその縮尺や色刷りの印刷は、人びとを引きつけたと考えられる。もうひとつは、短期間に編集印刷された公開用の版の欠を補う役割もあったと考えられる。公開版の修正箇所は脩製再版の全図幅でみとめられ、多くは校正漏れの修正と

いう感が強いが、交通路やそれに沿った集落について加筆する場合もあり、とくに朝鮮と清国の国境地帯や渤海湾の北西岸でそれが多という印象がある（図7）。

これに関連して想像をたくましくすると、前者の地域の場合は、1893年の秋～冬に行われた陸軍将校、倉辻明俊と陸地測量部の測量手、藤田五郎太の朝鮮と中国の国境を何度か越える旅行（渡辺ほか 2017: 141）の成果を反映させる可能性も考えられる。倉辻は変名して技師を装った国境地帯の旅行から漢城（ソウル）にもどったあと、1894年のはじめに再度護照申請を行って朝鮮国内の旅行をつづけており、彼等の旅行の報告がいつ頃提出されたかが気になるところである。後者については、日本軍が最終的に北京に進攻する計画をたて、渤海湾の上陸地点に関心を持っていたことが思い出されるが、そうした情報まで、民間に公開するつもりであったのかという点も含めて、更に検討してみたい。

表 2：100 万分の 1 「假製東亞輿地圖」脩製再版一覧表

番号	タイトル	カバー範囲	刊行年月日	経緯度
1	吉州：北青府.鏡城府.會甯府.鐘城府	清領滿州盛京省.吉林省.朝鮮國咸鏡道.平安道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	125°-130°E 40°-42°30'N
2	奉天府：錦州城.鳳凰廳.營口.義州府	清國直隸省.清領滿州盛京省.朝鮮國平安道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	120°-125°E 40°-42°30'N
3	承德府：宣化府.遵化州	清國直隸省.清領滿州盛京省	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	115°-120°E 40°-42°30'N
4.	漢城：平壤府.咸興府.元山津	朝鮮國京畿道.黃海道.平安道.江原道.咸鏡道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	125°-130°E 37°30'-40°N
5	芝罘：登州府.復州.旅順口	清國山東省.清領滿州盛京省.朝鮮國黃海道.平安道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	120°-125°E 37°30'-40°N
6	北京：天津.保定府.永平府.河間府.定州	清國直隸省.山東省	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	115°-120°E 37°30'-40°N
7	釜山：原州.公州.全州府.大邱府.仁川府	朝鮮國忠清道.慶尚道.全羅道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	125°-130°E 35°-37°30'N
8	膠州：萊州.平度州.威海衛	清國山東省	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	120°-125°E 35°-37°30'N
9	齋南府：泰安府.兗州府.濟甯府.大名府	清國山東省.直隸省	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	115°-120°E 35°-37°30'N
10	長崎：佐世保.巖原.綾州.濟州	日本國西海道.朝鮮國慶尚道.全羅道	明治 27 年 12 月 13 日印刷発行	125°-130°E 32°30'-35°N

注：全図色刷り（黒・赤・青・茶）。サイズは 46.0×57.9cm。

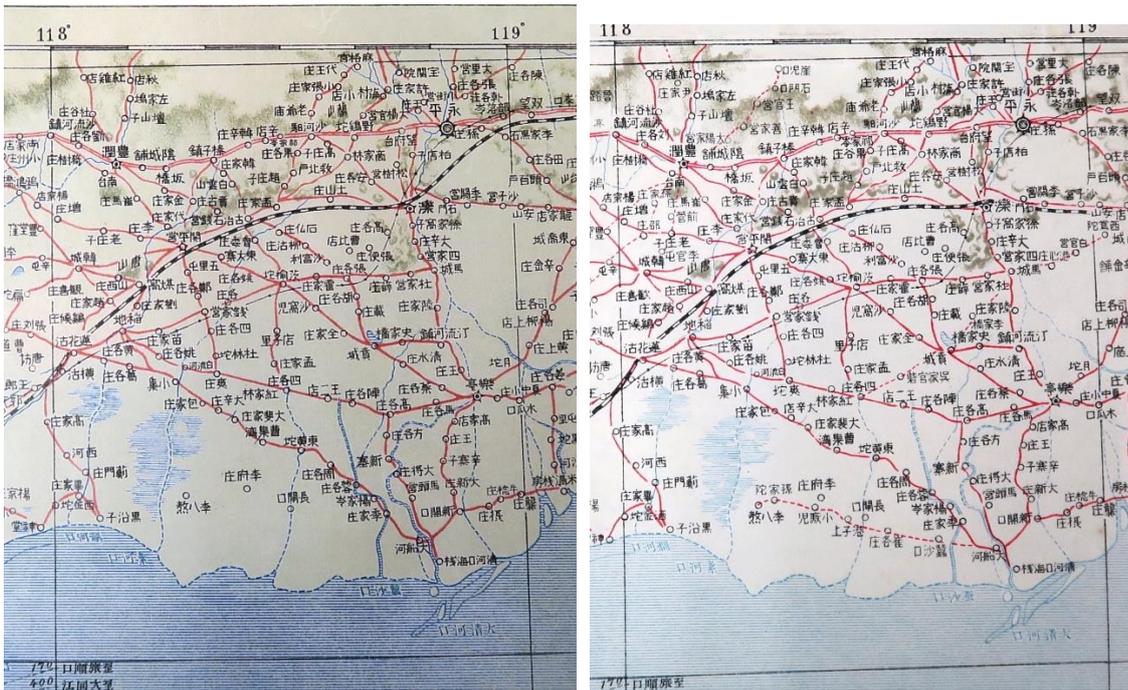


図7：假製東亞輿地圖「北京」図幅にみられる変化（左は假製東亞輿地圖、右は假製東亞輿地圖脩製再版）

以上、まだ不十分な点が少ないが、「假製東亞輿地圖」の作製と刊行に関連して注目される点を検討した。これから、国際100万分の1図作製の打診に刺激されて、軍事を優先させて「假製東亞輿地圖」が作製されたことになるが、それに際して陸地測量部製図科長の早川省義の判断が大きな意義をもったと考えられる。またそれにあたっては、1880年代に陸軍将校が収集した地理情報だけでなく、金正浩の「大東輿地圖」のような朝鮮図、『大清會典』用の地図のために準備された方眼図が少なからぬ意義をもったことも推測された。いずれの図も近世的な手法で作製されているとはいえ、19世紀後半の近い時期のものであり、上記のような利用にたえるものとして評価されたと考えられる。

「假製東亞輿地圖」は、1880年代の陸軍将校の測量からしても近世的な性格を強くもち、近代的な地図への過渡期の地図と位置づけられる。早川省義が手がけた「輯製二十万分一圖」（国内用）もまさしくそうした図であり、以下のような『陸

地測量部沿革誌』の明治17（1884）年記述は、関連して注目しておくべきであろう。この年には内務省から「全国三角測量」の業務が移管されるだけでなく、参謀本部條例が改正され、測量局が設置され、その服務概則をはじめとする規則が制定されるとともに、早川工兵大尉は地圖課長心得を命じられる。ただし三角測量を基礎とする本格的な近代測量はなかなか進められず、それを待つ間、つぎのような作業が進められた。

地圖課は早川課長先ツ伊能圖ヲ基礎トシ各府縣調製ノ地圖ヲ校訂参酌シ梯尺二十万分一色線號式ノ全國地圖ヲ作り一般ニ便センコトヲ圖リ早乙女十一等出仕等ヲシテ圖稿ヲ起サシメ之ヲ前年來（岡部出仕等）研究改良ノ轉寫石版ニ（尋テ寫眞電氣銅板ニ）依リテ製版セシメタリ所謂「輯成二十万分一圖」ナルモノ是ナリ此地圖ヤ固ヨリ精密ヲ以テ目ニスルヘキニアラスト雖モ輯製編纂圖トシテハ概シテ其ノ要ヲ得能ク當時ノ需要ニ適シ實ニ我國地圖ノ代表スルノ觀アルニ至

レリ (陸地測量部1922: 66)

早川の「清國二十万分一圖」・「朝鮮二十萬分一圖」を基礎にした「假製東亞輿地圖」作製の構想は、この国内での経験を東アジアに拡大するものであったわけである。

## 文献

小笠原義勝 1962. 「国際百万分一世界地図とその新図式」 地学雑誌 71(6): 281-286.

小川琢治 1904. 「日露交戦地方の重要な地圖に就きて」 地学雑誌 16 (184) : 260-264.

久源太郎解題 1990. 『陸軍省年報』第3巻、龍溪書舎.

古道編委会編 2005. 『奉天全省地輿圖説』西安地圖出版社.

小林茂 2013. 『陸地測量部沿革誌』解説 復刻版 『陸地測量部沿革誌』不二出版, 1-29.

小林茂編 2017. 『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会.

小林茂・岡田郷子・鳴海邦匡 2017. 「19世紀後半の朝鮮半島の地理情報と花房義質」小林茂編 『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 42-74.

小林茂・渡辺理絵・山近久美子 2017 「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」小林茂編 『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 76-111..

《中国測繪史》編集委員会編 1995. 『中国測繪史、第二巻、明代至民国』測繪出版社.

長岡正利 1992. 「百万分一東亞輿地圖『奉天』」 地図 39(3): 52-55.

樋口雄彦 2006. 「大原幽学没後門人と明治の旧幕

臣」国立歴史民俗博物館研究報告 125: 119-154.

細井将右 2006. 「明治初期フランス人地図測量教育者ジュールダンとヴィエイヤールについて」創価大学教育学部論集 57: 35-45.

山崎直方 1905. 「支那の地圖に就きて」地質学雑誌 12 (146) : 371-378.

吉田光男監修・金正浩校刊 1994. 『大東輿地図』草風館.

陸軍参謀本部編 1985. 『朝鮮地誌略 2』龍溪書舎. 陸地測量部 1922. 『陸地測量部沿革誌』陸地測量部.

陸地測量部 刊行年不詳. 『陸地測量部沿革史(草案)後編、自明治二十二年五月至基本測図完了』日本地図資料協会.

Amelung, I. 2007. New maps for the modernizing state: Western cartographic knowledge and its application in 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> century China. Bray, F., Dorofeeva-Lichtman, V., and Métaille, G. eds. *Graphics and Text in the Production of technical Knowledge in China*. Brill, 685-726.

Anonymous 1894. *The China Sea Directory* vol. 4 (3<sup>rd</sup> Edition). Hydrographic Office, Admiralty.

Anonymous 1900. La carte au millionième du service géographique de l'armée. *Annales de Géographie* 9 (44): 176-177.

Pearson, A.W. and Heffernan, M. 2015. Globalizing cartography: The International Map of the World, the International Geographical Union, and the United Nations. *Imago Mundi* 67(1): 58-80.